

「福島県いわき市のコミュニティ再生&強化、耕作放棄地を減らす」事業

耕作放棄地を活用して地元の人と一緒に作物をつくり、地域のコミュニティの再生につなげる

全国各地で街の清掃活動をするNPO法人グリーンバードでは、東日本大震災後の2012年から、福島県いわき市で耕作放棄地を蘇らせてオーガニックコットンを育てる活動を行っている。月に1回、日帰りバスツアーを組んで継続的にボランティアを送り、放棄地を耕すところから収穫まで一貫して行うプロジェクトとして展開。11月には2度目の収穫祭を迎えた。

いわき市の耕作放棄地を開墾するボランティアバスツアーを実施

耕作放棄地とは、1年以上作付けされず、今後数年も作付けする予定のない田畑や果樹園のこと。農業従事者の減少や高齢化などに伴い全国各地で増え続けている。一度耕作をやめて何年かたてば、農地として復帰させるのは容易でないほど荒廃するばかりでなく、周りの環境にも悪影響を及ぼし、さらにはゴミの不法投棄場となる事例もあるなど、耕作放棄地の問題は深刻だ。

グリーンバードはゴミのポイ捨てを減らす活動を行うNPO団体で、全国55カ所のチームで展開している。2011年に仙台チームが被災したのをきっかけに、仙台市若林区で農場の復興支援活動を1年間行い、さらにいわきチームから福島県の現状の報告を受け、2012年より

いわき市で「耕作放棄地を蘇らせてオーガニックコットンを育てるプロジェクト」を開始した。グリーンバードのブランドマネージャーを務める入山忠さんは、プロジェクトの目的について次のように話す。

「以前から耕作放棄地が問題になっていたところに震災で被害を受け、さらに原発の風評被害で農作物の出荷や販売が著しく低迷するなど、福島県の状況はより深刻なものになっています。また、震災後の避難や移住により、もともと地域にあったコミュニティが今やバラバラになってしまっています。そこで耕作放棄地を活用して地元の人と畑をつくり、一緒に作物を育てていき、コミュニティの再生につなげていこうというのがこのプロジェクトの目的です。口に入るものが売れないということで、地元の方たちが考えたのがオーガニックコットンの栽培でした」

さまざまなしがらみのある地域のコミュニティの再生には、外部から人が来るということが非常に重要になる。そのため、月に1回、バスツアーを企画して参加者を募り、東京からいわき市に継続して送る体制をつくった。それに必要な貸し切りバスのチャーター費用やコーディネート費用などにAJOSCの助成が充てられた。

20～30代のメンバーが中心である団体のモットーは「ゆめ、楽しく」。作業後は温泉に入り、交流会で盛り上がる。週末の日帰りツアーのため参加しやすく、農業に興味



ボランティアツアーには毎回40名近い参加者が集まる



畑づくりは地道な開墾作業から始まる



耕して種をまいて手入れをしてきた畑に実ったオーガニックコットン



収穫したオーガニックコットン

のある人から、一度ボランティアを経験してみたかったという人まで参加者はさまざまで、35～40名の定員は毎回いっぱいになるという。

耕作から収穫まで一貫して行うプロジェクト

畑はいわき市の沿岸部、津波の被害を受けた久之浜地区にあり、放棄地だった土地を耕すところから収穫までを一貫して行う。それにより参加者も定着し、思い入れが生まれる。また、農作業の後には、地元の人たちとの話し合いの場を設けて、次回の方針や今後の活動内容を一緒に決定する。こうしてプロジェクトも2年目となり、地元の人たちとの絆も強くなってきているという。

「支援の仕方にはいろいろな考え方があると思いますが、震災から3年目の今は、地元の人と密に連絡を取り

担当者より



気持ちの良い助成に感謝しています

NPO法人グリーンバード
事務局
ブランドマネージャー
入山忠さん

AJOSCの助成には縛りがなく、事業の中で自由に使うことができ、とても気持ちの良い助成をいただいていると感じています。今回はボランティアを運ぶバスのチャーター費用などに活用させていただきました。団体の本来の活動に加えて被災地支援事業を継続していくのは正直大変でしたので、とても助かりました。

合って情報を共有したうえで、ある程度長いスパンで一貫した支援が必要だと考えています。地元の方の協力がなければこの事業は成り立ちませんし、僕らにしてもこの人たちのために頑張ろうと思えるからこそ長続きするのです。ボランティアに参加した人の中には月1回の作業以外にも個人的に地元の方と交流する人も多く、皆さんも喜んでくれています。すぐに地域のコミュニティ再生につながるとは思いませんが、僕らの存在がひとつのきっかけになればうれしいです」と入山さん。

秋はオーガニックコットンの収穫期。今年は11月下旬に予想を上回る量を収穫できた。収穫したコットンはTシャツにしたり、コットンドールを作って販売する。日本の市場を考えるとオーガニックコットンで生計を立てるのは難しいが、この試みが農業の復興を模索していくうえでの第一歩となったのは間違いない。さらに今年度は2つ目の畑を開墾して有機野菜づくりを始めており、こちらも販売につなげたいと考えている。

福島県の中で最大の面積を持ついわき市には、現在多くの耕作放棄地が残っている。今後は農業の復興を長期的に見据えて、畑の開拓を久乃浜エリアからいわき市全域に広げていくことを目指す。と同時に、この活動をグリーンバードのネットワークで全国に発信、展開していくことも視野に入れている。